

変項名詞句の階層を再考する*

—N-意味理論の分析の批判的検討と指示参照ファイル理論による分析—

山泉実

yamaizumi.minoru@gmail.com

キーワード： 変項名詞句 N-意味理論 指示参照ファイル理論 潜伏疑問

要旨

N-意味理論の高階の変項名詞句・変項名詞句の階層による潜伏疑問文などの分析を批判的に検討し、指示参照ファイル理論 (RFT) による同じ現象の分析を提示した。変項名詞句の階層による分析では、高階の命題関数の変項を埋める側が変項を含まない解釈が扱えないという問題を指摘した。そして、指示参照ファイル理論による分析は、N-意味理論のもたらした知見だけでなく、新たなデータも扱えることを示した。最後に、変項名詞句の階層の代わりに、様々な特定性の解釈をラティス構造にまとめることで、RFT によって表示できる解釈の多様性を捉えた。

1. N-意味理論と指示参照ファイル理論

意味論・語用論の枠組みである N-意味理論 (西山 2003、西山編著 2013、今井・西山 2012: 4-6 章など) は、名詞句を中心に様々な表現を分析している。分析に用いられる概念の中で変項名詞句という概念が最重要とされる (西山 2013: 331)。本稿は、この枠組みで峯島 (2013a) が論じている高階の変項名詞句を含む変項名詞句の階層、およびそれに関連する現象を批判的に検討し、指示参照ファイル理論 (Reference File Theory、以下、RFT。山泉 2020a, 2020b, 2021 など) による、その問題点を克服した分析を提示する。

N-意味理論の解説は、上記文献に譲り、本節以下では、指示参照ファイル理論を山泉 (投稿中 b) から極々簡単に導入する (詳しくは上記文献参照)。2 節では、N-意味理論の高階の変項名詞句という概念とそれに関係する概念を紹介し、それによる分析を批判的に検討する。その後、その現象に対する指示参照ファイル理論による分析を提示し (3 節)、変項名詞句の階層で捉えきれない解釈も含めた解釈可能性の全体像をラティス構造で捉える (4 節)。

RFT は、主に名詞句の意味とそれによる (語用論的) 指示の問題を認知的視座から扱う理論で、ジャッケンドフ (2012/2019) の指示参照ファイル (RF) という心的表象の概念の精緻化によって、N-意味理論の扱う現象をより良く分析しようとする。(語用論的) 指示が起こるには、名詞句と指示対象が言語使用者の心的表象によって仲介される必要がある。たとえば、太郎を見つけて「あ、太郎だ」と言ったとき、名詞句「太郎」と指示対象の太郎は、指示対象に対応

* 本研究は、科学研究費 (課題番号: 17K17842) の助成を受けて行われている研究の一部である。本稿の執筆にあたり、田中太一、宮田瑞穂、木下蒼一郎ら諸氏との議論が大いに参考になった。記して深謝する。

する心的表象を介して指示という関係を結ぶ。その心的表象を RF と言う。もともと、RFT は、ジャッケンドフ (2002/2006) に従って、認知的視座を徹底し、「世界」を心の中に押しこめる」(10.4)。つまり、人間は世界を認知によって構造化し、概念化した結果としての世界 (概念世界) に生きている。指示対象も客観的実在世界にあるのではなく、言語使用者によって概念化された世界にあるとする。RFT でもそう考え、RF1 つには、概念世界の 1 つの対象が相当する。RF に相当するものは、たとえ実在しなくても対象である。逆に、たとえ実在しても概念化者に知られていなくて、相当する RF を構築しえないのであれば、概念化者にとって対象は存在しない。

RFT のもう 1 つの源流は、関連性理論に基づいた言語進化論 (スコット=フィリップス 2015/2021) である。これによると、言語は、サルや鳥の鳴き声のようなコードモデル・コミュニケーションに用いられる自然コードが複雑化したものではなく、意図明示・推論的伝達 (Ostensive-Inferential Communication、以下 OIC) を強化することを機能として発生・進化したものである。OIC において発信者は、意図の証拠を提示し、証拠に気付いた受信者は発信者の意図を推測する。OIC は常に心の読み合いを伴うが、会釈や含み笑いに見られるように、言語は必須ではない。非言語 OIC が言語に先立って進化し、言語は OIC をより汎用的・効率的・正確にすることを機能として進化した。そのため、言語は OIC に最適化されているはずである。その一部である名詞句の意味も OIC に最適化されていると RFT は考え、名詞句の意味とは話し手が推測した聞き手の心における RF (又はその一部) だという可能性を RFT は追求する。話し手は聞き手の心的状態を常に推測しているからである。聞き手は、話し手の心にあるそのような RF を推測して、自らの心で RF を構築・操作する。こうして OIC が行われていると考えられる。

RF は以下の 4 つの素性を持つ (RF のデータ構造について、より詳しくは山泉 (2021) 参照)。これらは、人間が必ずしも言語を用いずに世界の対象をどのように概念化しているかを捉えようとしたもので、名詞句の意味の多様性を記述する可能性を提供する。

I. 存在論的範疇 ONT モノ、コト、人など、RF に対応する対象の存在論的範疇を表す。タイプ・トークンの区別がある範疇においては、[±token]によってそれを表す。距離のようにこの区別を持たない範疇は RF の部分構造 (特に後述の[特質: 値]) を成し、RF 全体には対応しない。人 (体・心) のように範疇を組み合わせたドット事物 (ジャッケンドフ 2002/2006: 11.10) になり得る存在論的範疇もある。

II. ID RF は長期記憶にあるものではなく、ワーキングメモリにその都度作られる。対応する対象についての知識が全部 RF に入っているわけではなく、その場で活性化しているものだけが含まれる。そうだとしたら、たとえば昨日太郎を哲学者として話題にしたときに太郎に対応した RF と、今日太郎を父親として話題にしたときに太郎に対応した RF が同じ対象に対応するものであるということを保証する必要がある。それをするのが ID である。ID には以下の 4 種類がある。i. 同定されている対象に対応する RF が持つ定項 (a, b, …)。ii. 未決定の勝者やジグソーパズルのピースのような未同定の対象の RF が持つ自由変項 (x, y, …)。iii. 存在しないことがわかった対象に対応する RF が持つ null 値 (ϕ , ϕ , …)。iv. 叙述名詞句に対応する RF

が持つ束縛変項 (α, β, \dots)。これは述語付けされる名詞句に対応する RF の ID によって束縛される。なお、ID の値は、RFT の議論でその RF 全体を代表するためにも用いられる。

RF は、その存在論的範疇によって、どのように同定・個体化されるかが異なる。コトは、内容によって同定されるため、内容そのものが ID を成す。そのような ID を内容 ID と言う。

III. 位置付け (@) 人間は、自分が現実世界の実態と考えるもの以外の世界も理解できる。他人の心、フィクション、願望などである。このようないわば有標の世界に位置付けられる RF には、@以下に位置付けを明記する。また、次に述べる内容特徴ごとに@が必要になることもある。名詞句に対応する RF は、話し手が想定する聞き手の心に位置付けられるため、名詞句に対応する RF の位置付けのデフォルトの値は、「@ (話し手が想定した) 聞き手」である。

IV. 内容特徴 対象についての個別的な知識のうち、ワーキングメモリにおいて活性化しているものである。記述 (例 a が学生である)、特質-値 (例 a[体重: 60kg])、関係性-リンク先 (例 a 《父親: 次郎》) の 3 種類がある。知識の更新とともに内容特徴には更新や増減がある。内容特徴がいくら変わっても、ID の値が同じならば同じ対象とみなされる。

RF は対象を視覚的に認識・追跡する際など、言語による指示以外にも使われていると考えられる認知的構築物で、概念構造の部分構造を成す。概念構造は、言語そのもの (音韻構造・統語構造とそれらを一端とするインタフェース、Culicover and Jackendoff 2005: 20) の一部ではなく、進化的にもそれに先行するものである。意味論を狭義に、言語形式がコード化する概念構造への制約とその組み合わせ方の研究とするのであれば、制約される側、すなわち概念構造そのものの研究である RFT は意味論ではない。しかし、概念構造自体の研究は、概念構造への制約の研究にとっても必要であることは言うまでもない。

2. “2 階の変項名詞句” とは

変項名詞句とは、指定文構造の命題関数 (open proposition) を表すとされる名詞句である。たとえば、(1)の下線部が表すとされる命題関数[x が太郎を殺した]の変項 x に花子を入れると命題〈花子が太郎を殺した〉が出力される。以下の例の下線部は、変項名詞句であり、[]の命題関数を表すとされる。

- (1) 花子が太郎を殺した犯人だ。[x が太郎を殺した犯人だ]
- (2) 実験室の温度は 26 度だ。[実験室の温度は x 度だ]
- (3) カキ料理は広島が本場だ。[x がカキ料理の本場だ]
- (4) 100m を 8 秒で走れる人は存在しない。[x が 100m を 8 秒で走れる人だ]
- (5) 次郎はこの事件の被害者 (が誰か) を知らない。[x がこの事件の被害者だ]
- (6) 太郎の住所 (がどこか) を教えてくれ。[x が太郎の住所だ]

これらの命題関数の変項 x は「個体」が埋めるとされ (p. 409)、そのような命題関数を表す変

項名詞句は1階の変項名詞句と言われる。¹

N-意味理論で論じられる変項名詞句の大部分は1階のものだが、2階以上のものもあり、高階の変項名詞句と言われる。3階以上は3.2.3で議論するだけであるから、以下では2階の変項名詞句とは何かを峯島(2013a)に即して詳しく説明する。本稿において重要なのは、命題関数の変項は個体以外が埋めることもあるということである。次の倒置指定文の例を検討しよう。

(7) 今度の実験で一番重要なことは、この部屋の温度だ。 (p. 413)

主語の「今度の実験で一番重要なこと」は変項名詞句で、[Xが今度の実験で一番重要だ]という命題関数を表すとされる。この命題関数は、(1)から(6)のものとは違って、Xに別の命題関数が入る。Xには、(1)から(6)の[]のような、個体によって充足される変項xを持つ命題関数が入り、このことをXを大文字にすることで表している。この例では「この部屋の温度」が表す[この部屋の温度はx度だ]がそれを埋めるとされている。[この部屋の温度はx度だ]のように個体によって充足される変項を持つ命題関数を1階の命題関数、1階の命題関数によって充足される変項を持つ[Xが今度の実験で一番重要だ]のような命題関数を2階の命題関数という。2階の命題関数によって充足される変項(XXとしておく)を持つのは3階の命題関数である(3.2.3)。(7)で温度が問題になっている部屋の温度が26度だとすると、この例のXとxは次のように埋められることになる(p. 410の図を改変)。

(8) [Xが今度の実験で一番重要だ] 2階の命題関数 (1階の命題関数が引数)

↑変項を充足する/問いの答えとなる

[この部屋の温度はx度だ] 1階の命題関数 (“個体”が引数)

↑変項を充足する/問いの答えとなる

26度 “個体”

上では、変項を充足するという関係と問いの答えとなるという関係が並列されている。これは、峯島が命題関数とWh疑問(問い)を理論上同一視している(p. 427)ため、両者は区別されないからである。もう1つ峯島(2013a)から例を挙げる。

(9) 先週から気になっていたことがやっとわかった。(p. 417)

(それはパソコンが突然動かなくなった原因だ。)

パソコンが突然動かなくなった原因が電源ケーブルが抜けたことだとすると、この例における変項をめぐる関係は次のように図示できる。

¹ 26度を個体として扱ってよいかは問題である。

- (10) [X が先週から気になっていたことだ] 2 階の命題関数
 ↑変項を充足する／問いの答えとなる
 [x がパソコンが急に動かなくなった原因だった] 1 階の命題関数
 ↑変項を充足する／問いの答えとなる
 (パソコンの電源ケーブルが抜けた) “個体”

2.1 “2 階の変項名詞句”として解釈可能な名詞句の条件

2 階の変項名詞句は比較的珍しい。どのような名詞句が 2 階の変項名詞句として解釈できるのか。峯島 (2013a) は、「名詞句内部の修飾節（関係節）に、問い（Wh 疑問）を意味上の項としてとる[...]述語が埋め込まれている点」（p. 413）を、そこまでに登場したものの共通点として挙げている。たとえば、(9)では 2 階の変項名詞句「先週から気になっていたこと」の内部に関係節「先週から気になっていた」があり、そこに問いを意味上の項としてとる述語「気になっていた」が埋め込まれている。峯島はこれを一般化して次の条件にまとめている。1 階の変項名詞句として解釈可能な名詞句の条件も併せて引用しておく。

- (11) 2 階の変項名詞句として解釈可能な名詞句の条件[...]: N を主要部とする修飾節を伴う名詞句 [...e_i...]N_i は、e_i が 1 階の変項名詞句が現れる位置であるならば、2 階の変項名詞句として解釈可能である。（p. 414）
- (12) 1 階の変項名詞句として解釈可能な名詞句 : N を主要部とする修飾節を伴う名詞句 [...e_i...]N_i は、e_i が指示的名詞句が現れる位置であるならば、1 階の変項名詞句として解釈可能である。（p. 415。次例参照）
- (13) a. 太郎が本を買った。（下線部は指示的名詞句が現れる位置）
 b. 太郎が e_i が買った本_i（はこれだ）。（下線部は 1 階の変項名詞句）

なお、次例の主語のように関係節がないのに 2 階の変項名詞句として解釈できるものもある。したがって、(11)の条件はせいぜい十分条件として解釈すべきものであろう。

- (14) 花子の秘密は、 どこで生まれたかだ。
 [X が花子の秘密だ] [花子が x で生まれた]

2.2 A タイプ読みと B タイプ読み

2 階の変項名詞句と言われる名詞句の最も興味深い点は、2 階の変項名詞句ではない A タイプ読みと言われる読みがあることである。2 階の変項名詞句の読みは B タイプ読みと言われる。次の発話を例に説明する。

(15) 太郎は今度の実験で一番重要なことを知っている。(p. 411)

まずは、B タイプ読み=2 階の変項名詞句読みから説明する。その場合、この文を次のようにパラフレーズできる。

(16) 《太郎は、何が今度の実験で一番重要なことであるのかを知っている》(p. 417)

(15)の主節の述語「知っている」の意味上の目的語項は、[何が今度の実験で一番重要であるか]という問いとみなすことができる (p. 417)。この発話が真ならば、太郎は、その実験を知っている人で、「何が今度の実験で一番重要なこと？」と問われたとき正しく答えることができる。B タイプ読みでは2 階の命題関数の変項 X が埋められるということである。「何が今度の実験で一番重要なこと？」という問いの答えは「実験室の温度は何度であるか」だとして。この場合、太郎は、「実験室の温度は何度？」という問いの答えを知っている必要はない。

さて、(15)の A タイプ読みは、次のようにパラフレーズできる。

(17) 《太郎は、今度の実験で一番重要なこと、つまり、実験室の温度は何度であるのかを知っている》(p. 416)

A タイプ読みでは、(17)が真でも、太郎は「何が今度の実験で一番重要なこと？」という問いの答えを知っている必要がない。例えば、太郎は実験を行う研究室のメンバーではなく、実験室のある建物の空調の管理人であって、実験について何も知らない場合でも、A タイプ読みの(15)は(17)を表せる。太郎が「実験室の温度は何度？」という問いに正しく答えられさえすれば A タイプ読みの(15)は真になる。主節の述語「知っている」の意味上の目的語項は、[何が今度の実験で一番重要であるか]という問いではなく、[実験室の温度は何度であるか]という問いである (p. 416)。つまり、A タイプ読みの(15)の表面に現れている「今度の実験で一番重要なこと」は、それは何かという問いを直接的に表すのではなく、[実験室の温度は何度であるか]という問いを「間接的に提示するという役割を果たしているに過ぎない」(p. 417)。A タイプ読みでは大文字の変項 X ではなく小文字の変項 x を述語が問題にしているということである。A タイプ読みの「今度の実験で一番重要なこと」のような名詞句は、2 階の変項名詞句ではないし、1 階の変項名詞句でもない。後述するように、指示的名詞句のようなものと峯島は議論している。したがって、変項名詞句とは言えないため、以下、「A タイプ読み名詞句」と呼ぶ。

2 つの読みの違いをすぐに把握するのは容易ではないかもしれない。理解の助けのために以下のようにまとめておく。

- (18) 今度の実験で一番重要なことは？ ←これに答えられるという意味が B タイプ読みの(15)
 | (それが実験室の温度の場合)
 実験室の温度は？ ←これに答えられるという意味が A タイプ読みの(15)

2.3 批判的検討：第3の読みがあることとその含意

以上を踏まえて、この分析を批判的に検討していく。実は峯島 (2013a) は、(15)にもう1つの読みがあることを註で指摘している。

「知っている」の意味的な項を「一こと」という形の名詞句が表す命題ないし事実 (fact) とみなして、例えば、「太郎は今度の実験で一番重要なこと、つまり、部屋の温度が 26 度であることを知っている」と解釈することも可能であろう。(p. 428)

この場合、(15)の「今度の実験で一番重要なこと」が表す命題関数の変項は、命題関数ではなく、〈部屋の温度が 26 度である〉という変項のない命題で埋められる。そのため、「今度の実験で一番重要なこと」は 2 階の変項名詞句ではない。この読みもパラフレーズ(16) 《太郎は、何が今度の実験で一番重要なことであるのかを知っている》で表せるけれども、B タイプ読みではないのである。また、「今度の実験で一番重要なこと」は、別の問いを間接的に提示しているわけでもないから、A タイプ読み名詞句でもない。むしろ、1 階の変項名詞句である。変項を埋める〈部屋の温度が 26 度である〉に変項が含まれていないからである。ということは、「今度の実験で一番重要なこと」が表す命題関数は、小文字の変項 x を含む $[x$ が今度の実験で一番重要なことだ]ということになる。つまり、(15)は、N-意味理論では A タイプ読み、B タイプ読み (2 階の変項名詞句)、1 階の変項名詞句読みの 3 通りに曖昧ということになる。

しかし、この3つの読みが意味論的曖昧性であると考えられることには、述語「知っている」の意味、及び名詞句の意味機能の2点において大きな問題がある。N-意味理論は、「知っている」は CQ[=潜伏疑問]述語として潜伏疑問名詞句を要求する意味とは別に、指示的名詞句を要求する意味もあり、曖昧である」(西山 2013: 404) と考える。命題を表す指示的名詞句を項にとる「知っている」は叙実述語 (factive predicate)、一方、1 階の変項名詞句を項にとる「知っている」は潜伏疑問述語と区別されるだろう。もし本当に、「知っている」に 2 種類あるのだとしたら、潜伏疑問名詞句と指示的名詞句を同時に「知っている」の目的語にした文は次の文と同様のおかしさがあるはずだ。

- (19) ??太郎は、背中と電子メールをかいた。

元来、「掻いた」と「書いた」は同じ動詞だったようだが、現代語話者にとってはそう感じられないだろう。両者の目的語を等位接続できないのは、両者が別の動詞であるからと考えられる。同様のおかしさは、次の例 B にはない。今度の実験で一番重要なことは、実験者が気を抜かな

いことと部屋の明るさが何ルクスであるかだとして。「実験者が気を抜いてはいけないこと」は指示的名詞句、「実験室の明るさ」は潜伏疑問名詞句である。なお、「部屋の明るさ」が部屋が(ある程度)明るいことを表す読み(部屋 RF の特質[明るさ]の値が定項)も可能であるが、それはここで問題にしている解釈ではない。

(20) A: 太郎は今度の実験で大事なことを知っているかな?

B: 実験者が気を抜いてはいけないことと実験室の明るさを知っているから、大丈夫だよ。

「知っている」がもし意味論的に曖昧で、叙実動詞の「知っている」と潜伏疑問述語の「知っている」があるのだとしたら、「知っている」を解釈する際に曖昧性除去が必要で、一方を選んだらもう一方は選べないはずである。しかし、そう考えるべきではないということを(20)は示している。そもそも「知っている」は両者の意味で曖昧ではないとも考えられる。叙実述語の目的語である疑問節は、述語による強制 (coercion) によって疑問を解決する事実を表していること分析できる (Ginzburg and Sag 2000: 3.2.3, 8.3.1) からである。

問題は述語が曖昧かどうかだけではなく、名詞句の意味機能という N-意味理論が理論の根幹に据える概念にも及ぶ。次の文の「今度の実験で大切なこと」は、2 階の変項名詞句とも 1 階の変項名詞句とも言い難い。

(21) 今度の実験で大切なことは、実験者が気を抜かないことと部屋の明るさだ。

下線部が表すとされる命題関数[…が今度の実験で一番重要だ]の変項を埋めるものは、 x を含んだ 1 階の命題関数[部屋の明るさは x ルクスだ]だけではなく、 x を含まないコト[実験者が気を抜かない]でもあるからである。(21)は、命題関数[x ? X ?が今度の実験で一番重要なことだ]の変項を埋める値の名詞句と想定されているものとして、指示的名詞句(「実験者が気を抜かないこと」と)と 1 階の変項名詞句(「部屋の明るさ」)が並列可能であることを示す。

さらに、「知っている」は、次のように、2 階の変項名詞句「先週から気になっていたこと」と 1 階の変項名詞句「花子の誕生日」を、そしてついでに変項のない命題を表す指示的名詞句「花子が月から来たこと」を同時に項にとることもできる。

(22) 太郎は、花子について 3 つのことを知らなかった。花子が先週から気になっていたこと(≡何が気になっていたか)と花子の誕生日と花子が月から来たことを知らなかったのだ。

N-意味理論では、変項名詞句と指示的名詞句は、意味論レベルの表示である論理形式において区別される(西山 2013: 265)。2 階の変項名詞句と 1 階の変項名詞句も同様だろう。しかし、(22)は表意において、2 階の変項名詞句、1 階の変項名詞句、指示的名詞句がそれほど異質なものであることを示唆している。(15) (太郎は今度の実験で一番重要なことを知っている。)の

3つの読みは、意味論的曖昧性として区別されるべきではないということなろう。さて、論理形式から表意に至る際に、意味論的タイプを変えられないという制約—「自由拡充への最小の言語的制約」(峯島 2013b: 522)—が(少なくとも自由拡充には)あるとされている。したがって、表意における3種類の意味機能の区別は、論理形式から引き継がれたものであるはずだ。つまり、2階の変項名詞句と1階の変項名詞句と指示的名詞句は論理形式においても区別されるものではないということになる。そうなると、論理形式における名詞句の意味機能の区別というN-意味理論の根幹が脅かされる。

以上の議論から筆者は次のように考える。2階の命題関数の変項Xとされるものは、命題(あるいは事実、山泉 投稿中 a)で埋められなければならないとしても、埋めるものは、変項x(例 x度)の代わりに定項a(例 26度)を含んでいてもよい。その場合、変項を埋められる命題は、定義上2階の命題関数ではない。つまり、2階の命題関数と言われるものの引数は1階の命題関数である必要はない。このことは、「問いを答えとして要求する問い」(p. 409)、2階の変項名詞句、変項名詞句の階層という概念によってこれまで論じてきた現象を捉えようとするN-意味理論の分析が重要な一般性を見逃していることを示している。N-意味理論の分析が、変項名詞句という概念を偏重した結果として一般性を捉えそこなっていることは、潜伏疑問文に関しても潜伏命題文に関しても見られた(山泉 2021, 投稿中 a)。パラダイムを確立し、「凱歌をあげた学派は、手におえない不完全な情報のプールのなかで、自己の所信と先入観に合う、ある特別の部分だけを強調する」(クーン 1970/1971: 20)という歴史が繰り返されているように思われる。

なお、峯島(2013a)は、第3の読みの存在を指摘しつつも、「ここでは、[(15)]の解釈として、潜伏疑問文の解釈、つまり、動詞「知っている」をCQ[=潜伏疑問]述語として解釈したケースに限定して考えている(p. 428)」と除外している。峯島は他の箇所でも、「自然な解釈」(p. 408)や「少なくとも2通り」(p. 416)とあって、議論を変項を含む解釈に限定し、他の解釈は取り上げていない。変項名詞句の階層によって捉えられないために除外せざるを得なかったのだろう。N-意味理論は変項名詞句と指示的名詞句を全くの別物とするため、上の第3の読みを変項名詞句の階層の中では扱うことができないのである。しかし、変項を含まない値の解釈も一般化に際しては重要で、除外しないに越したことはない。等位接続で並列できる両者は、統一的に扱うことが求められる。

3. 峯島(2013a)の知見のRFTによる捉え直し

変項名詞句の概念を用いないRFTの分析を4節で提示する前に、以下ではまず、N-意味理論が変項名詞句の階層やAタイプ読み名詞句について明らかにしたことをRFTでも捉えられることを示す。

3.1 Aタイプ読みとBタイプ読み

まず、次の発話例²のAタイプ読みとBタイプ読みを確認しておこう。

(9) 先週から気になっていたことがやっとわかった。(p. 417)

Aタイプ読み (2階の変項名詞句ではない) : 「例えば、「先週から気になっていたこと、つまり、パソコンが突然動かなくなった原因がやっと分かった。」と言い換えられる読みである。」(pp. 417-418) 埋まるのはxである。

Bタイプ読み : 「典型的には、「先週から何かが気になっていたのだが、何が気になっていたのか忘れてしまった」という状況で[9]を発話した場合に浮かび上がってくる解釈である。つまり、「先週から気になっていたことがやっと分かった。それはパソコンが突然動かなくなった原因だった」という解釈である。」(p. 418) 埋まるのはXである。

「先週から気になっていたこと」に対応する指示参照ファイル (RF) を検討していく。

Aタイプ読みでは、次のようになる。

(23) 「先週から気になっていたこと」 / @聞き手 / 存在論的範疇 コト / 内容 ID a (=パソコンが原因 x で突然動かなくなった) / 内容特徴 話し手が先週から a が気になっていた

述語が表すのは、これの x の値が定まったということである。実験室の部屋の温度が何度かのように内容 ID の内容に変項が含まれていても、それを含む RF の内容 ID は定項である。

一方、Bタイプ読みではRFは次のようになる。

(24) 「先週から気になっていたこと」 / @聞き手 / 存在論的範疇 コト / 内容 ID y / 内容特徴 話し手が先週から y が気になっていた

そして、述語が表すのは、y の値が定まった、たとえば a (=パソコンが原因 x で突然動かなくなった) だったとわかったということである。どちらの場合も内容特徴に〈コト□³が先週から気になっていた〉が含まれるため、「先週から気になっていたこと」でそれぞれのRFに対応させることができるのである。

² N-意味理論は、文タイプの理論であるが、RFT は発話トークンを扱う。この点で両者にはズレがある。しかし、RFT に基づいた本稿の議論は、言語的にタイプのレベルでコード化された部分をも扱っているため一般化可能性があり、なおかつ、N-意味理論が議論するような文タイプの事例になるような発話を扱っているため、本稿の議論は文タイプの理論の代替案としても有効であると考えられる。

³ □は入るものが定項か自由変項かなど、項の種類に関してニュートラルであるプレースホルダである。

3.2 Aタイプ読み名詞句の“意味機能”と“指示機能”の関係

Aタイプ読み名詞句は2階の変項名詞句でも1階の変項名詞句でもないことを上で述べた。残る可能性として、「指示的な機能を果たしているという可能性」を峯島は指摘し、(15)[太郎は、今度の実験で一番重要なことを知っている。]の「今度の実験で一番重要なこと」を例に、次の案を提示している。

- (25) Aタイプ読み名詞句の意味機能についての峯島案 指示的な機能といっても、典型的な指示的名詞句とは異なり、世界の中の個体を指示するわけではなく、[この部屋の温度は何度であるか]といった疑問を提示する表現とみなす (p. 420)

RFTでも、Aタイプ読み名詞句は、(23)に見られるように、RFのIDが定項である点は典型的な指示的名詞句と共通しているといえる。もっとも、定項といっても、存在論的範疇はコトなどで、内容IDを持ち、その内容に自由変項が入っている点が特徴的である。このようなIDのRFを、その内容特徴の記述〈aが先週から気になっていた〉を関係節化してできた名詞句で表している。Aタイプ読み名詞句が「Wh疑問を間接的に提示するという役割を果たし」ている (p. 416) とN-意味理論がいうことは、これを捉えようとしたものである。しかし、内容IDは自由変項が入っていない〈実験者が気を抜かない〉などでもよいことは既に述べた通りである。⁴

峯島は、上の案に続けて、註で次のように述べている。

この案によれば、[(26)]にある「太郎が書いた本」を指示的名詞句としても1階の変項名詞句としても使用することができるという事実と、「今度の実験で重要なこと」という潜伏疑問文を埋め込んだ名詞句を(問いを提示するという意味での)指示的名詞句[=Aタイプ読み名詞句 引用者註]としても2階の変項名詞句としても使用できるという事実は、どちらも同様の意味論的メカニズムに基づくものと理解することができる。(p. 428)

- (26) a. 花子は太郎が書いた本を読んだ。(下線部：指示的名詞句)
 b. 太郎が書いた本はこれだ。(下線部：1階の変項名詞句)
 c. 太郎が書いた本がある。(下線部：1階の変項名詞句)

「太郎が書いた本」と「今度の実験で重要なこと」がどちらも複数の“意味機能”を果たすこと

⁴ ただし、(23)は述語「気になる」の性質上、自由変項が入っていない命題を内容IDにすることが難しい。たとえば、「語り得ぬものについては沈黙しなければならない」(ウィトゲンシュタイン『論理哲学論考』)は入るかもしれない。この意味するところが気になっていて、それがわかったという読みである。しかし、この場合、本当に自由変項がないのかは疑わしい。表現「語り得ぬ～」の意味がわからなくて、そこが自由変項になっていると考えられよう。表象の存在論的範疇は、形式と意味がドット付けられたドット事物であるから、それぞれに対応したIDがあり、この場合、意味の方が自由変項になっていたのが定まったと分析できる。

に見られる並行性は RFT では次のように捉えられる。

「太郎が書いた本」は、

指示的名詞句の場合、ID a⁵ / 内容特徴 〈a が本だ&太郎が a を書いた〉

1 階の変項名詞句の場合、ID x / 内容特徴 〈x が本だ&太郎が x を書いた〉

どちらもここに書いた内容特徴を使って RF 全体を表している。

両者の相違点は ID が a か x かという点である。

一方、「今度の実験で重要なこと」は、

A タイプ読みの場合、内容 ID a (=この部屋[温度:x 度]) / 内容特徴 〈a が今度の実験で重要だ〉。

B タイプ読み (2 階の変項名詞句) の場合、内容 ID y / 内容特徴 〈y が今度の実験で重要だ〉。

この場合も、どちらも内容特徴を使って RF 全体を表している。

ID が a か x かという点で両者が相違することも共通である。

峯島 (2013a) は、西山佑司氏の指摘によるとして、A タイプ名詞句がある意味で指示的な機能を担っていることが以下のことを示していると述べている。「[指示的な透明性] という時の「指示」の概念が、〈個体を指示する〉という意味だけでなく、〈問い (Wh 疑問) を提示する〉という意味にも拡張する必要がある」(pp. 428-429)。そうすると N-意味理論における指示という概念がますますわかりにくいものになるが、RFT では、個体を指示することも問いを提示することも、RF に対応するということであり、特に概念を拡張する必要はなく、両者の並行性は上で捉えた通りである。

3.2.1 代入推論の可能性

峯島 (2013a) は、自らの案を支持する根拠として、変項名詞句では不可能な代入推論 (以下参照) が A タイプ読み名詞句でも指示的名詞句でも可能であることを挙げている。指示的名詞句の代入推論とは、たとえば、法隆寺の五重塔が世界最古の木造建築物だとしたら、「太郎は、法隆寺の五重塔を見たことがある」から「太郎は、世界最古の木造建築物を見たことがある」が推論できるというようなものである。A タイプ読み名詞句の代入推論は(27)のようなもので、これが可能な理由を峯島は(28)のように説明している。

- (27) (設定 : 2 つの名詞句「今度の実験で一番重要なこと」と「花子がいまもっとも気にかけていること」がどちらも同じ問い [この部屋の温度は何度であるか] を表す)
太郎は、今度の実験で一番重要なことを知っている。(A タイプ読み)
それゆえ、太郎は、花子がいまもっとも気にかけていることを知っている。(p. 420)

⁵ 典型的には定項だが、属性的用法 (ドネラン 1966/2013) の名詞句では自由変項になる。

- (28) A タイプ読みの場合、下線部の名詞句「今度の実験で一番重要なこと」の機能はもっぱら、
[この部屋の温度は何度であるか] のような何らかの問いを提示することであり、この目的のために、話し手が「花子がいまもっとも気にかけていること」という別の記述を使うことも可能である。(p. 420)

RFT では、このような代入推論が可能なのは、2つの内容特徴が同じ ID の RF に共存しうるからだと説明できる。指示的名詞句の場合であれば、〈a が法隆寺の五重塔である〉と〈a が世界最古の木造建築物である〉が同じ RF に共存しうるため、「法隆寺の五重塔」に「世界最古の木造建築物」を代入できる。同様に、(27)の A タイプ読み名詞句の場合も、〈a[温度：x]が今度の実験で一番重要だ〉という内容特徴と〈花子がいまもっとも a[温度：x]を気にかけている〉がこの部屋 RF に共存しうるからそのような推論が可能なのである。(27)で問題になっている RF は温度という特質が関わり、次のように表示できる。

- (29) ID : a / 内容特徴 [温度：x] ; [温度：x]が今度の実験で一番重要だ ; 花子が[温度：x]をいまもっとも気にかけている。

この RF の部分である 〈[温度：x]〉は「今度の実験で一番重要なこと」でも「花子がいまもっとも気にかけていること」でも対応させられるため、代入推論が成り立つというのが RFT の説明である。

3.2.2 A タイプ読み名詞句の飽和？

A タイプ読みにおいて、「今度の実験で一番重要なこと」が〈実験室の温度は何度であるか〉などと解釈されるためには、コンテキストを参照して語用論的推論をする必要がある。このプロセスは、N-意味機能では飽和(化)とされている(今井・西山 2012:224)。峯島も次のように、今井・西山に一応同意している。

今井・西山(2012)が指摘する通り、この種の語用論的解釈は、飽和化(saturation)ないし指示対象の付与(reference assignment)と呼ばれる操作として理解するのが自然な考え方であろう。すなわち、「今度の実験で一番重要なこと」という名詞句が「実験室の温度は何度であるか」という問いを間接的に提示すると言う時、ここには典型的には「あいつ」や「その車」のような表現の指示対象を文脈から補う操作と同種の語用論的操作が働いていると考えられる。(p. 421)

しかし、直後に峯島は、「ただし、A タイプ読みがこのような語用論的解釈をつねに要求するわけではないという点に注意しよう」(p. 421)と、重要な指摘をしている。たとえば、

(30) 分からないことは図書館で調べるとよい。(p. 422)

この例の「分からないこと」に、特定の分からないことを補充するという飽和の操作をしなくても、一般的なアドバイスとしてこの発話は支障なく理解できる。

この“飽和”は、行わなくてもよいことがあるのであれば、飽和ではないと筆者は考える。飽和は、曖昧性除去と同様、義務的な語用論的操作であり、飽和が必要かどうかは言語的に決まっている(峯島 2013b: 519)。たとえば、指示代名詞は飽和が必要であり、使われたら飽和が必要である。A タイプ読み名詞句という意味機能を持つ名詞句にも飽和が必要ということになるのだろう。もしこの種の名詞句に常に飽和が必要ならば、A タイプ読み名詞句というカテゴリーが言語的に保証されるけれども、上で述べたように実際にはこの“飽和”はしなくともよい場合があるため、A タイプ読み名詞句というカテゴリーがこの点では言語的に保証されない。

RFT では、A タイプ読み名詞句の“飽和”は次のように捉えられる。たとえば、(30)の A タイプ読み名詞句「分からないこと」を“飽和”すると次のようになる。

(31) 「わからないこと」／内容 ID a (=「N 意味理論」の初出は x 年だ)／内容特徴 (x がわからない)

図書館で調べるべきとされているのは x の値である。A タイプ読み名詞句に飽和が必要でないということは、つまり、対応する RF の ID が自由変項のまま定めなくともよいということである。(31)の ID の定項を自由変項に置換した、“飽和”しない解釈だと RF は次のようになる。

(32) 「わからないこと」／内容 ID y (= [...x...])／内容特徴 (x がわからない)

[...x...]は、未知の部分が含まれる命題を表示している。この場合も図書館で調べるべきだとされているのは x の値であり、どの命題にそれが含まれているかを定めないため、一般的なアドバイスということになる。なお、同じ RF の y の値を図書館で調べるべきという B タイプ読み(≒「何がわからないことかを図書館で調べるべきだ」)も不可能ではないものの自然ではない。

3.2.3 3 階の変項名詞句

3 階の変項名詞句の例を峯島 (2013a) は 1 つ挙げている。

(33) 花子が知りたいことは、この種の実験で一番大切なことだ。(p. 428)

既に見たように、「この種の実験で一番大切なこと」が 2 階の変項名詞句であり、それを値とする「花子が知りたいこと」は 3 階の変項名詞句になる。2 階の命題関数によって充足されることを要求する変項を XX で表すなら、変項が埋まる関係は次のように示すことができる。

(34) [XX を花子が知りたい]

↑

[X がこの種の実験で一番大切だ]

↑

Ex. [x 度がこの部屋の温度だ]

↑

Ex. 26 度

RFT では(33)の名詞句「花子が知りたいこと」には次のような RF が対応すると分析できる。

(35) 「花子が知りたいこと」 / @聞き手 / 存在論的範疇 コト / 内容 ID x / 内容特徴 花子が x を知りたい

(36) 「この種の実験で一番大切なこと」 / @聞き手 / 存在論的範疇 コト / 内容 ID a (=この部屋の温度は x 度だ) (上の“飽和”をしなければ y) / 内容特徴 a (or y) がこの種の実験で一番大切だ。

2 階の変項名詞句になり得る名詞句は A タイプ読み名詞句として、1 階の命題関数を間接的に表すことが可能であった。N-意味理論で 3 階の変項名詞句になり得る名詞句は、2 階の命題関数を間接的に表すことができる。しかし、1 階の命題関数を表すことは必ずしも可能ではない。次の例を検討しよう。(この種の実験で一番大切なことを知りたい花子は実験室の温度がこの種の実験で一番大切だと知らないことに注意。)

(37) 花子が知りたいことが私にわかった。

(34)の関係が成り立っている場合、話し手にこの種の実験で一番大切なことが何かが分かったことを(37)で表すことができる。つまり、「花子が知りたいこと」は、2 階の命題関数[X がこの種の実験で一番大切だ]を間接的に表すことができる。一方、この部屋の温度が話し手に分かったことを(37)で表すことはできない。つまり、「花子が知りたいこと」は、1 階の命題関数[x がこの部屋の温度だ]を間接的に表すことはできない。N-意味理論ではこのような現象の指摘すらされていないが、RFT では、「花子が知りたいこと」に対応する RF(35)の中に、内容特徴〈y がこの種の実験で一番大切だ〉はあっても、〈この部屋の温度は z 度だ〉がないからだと説明できる。〈この部屋の温度は z 度だ〉は想定される聞き手の心では別の RF(36)の内容 ID になっている。変項名詞句の階層が成り立っている場合でも直下の階の情報までしか RF の内容特徴にはない、という一般化ができそうだ。

3.2.4 N-意味理論にとっての「残された問題」

峯島 (2013a) は論文の最後で、次の文を例に残された問題を議論している。

- (38) a. 太郎が次郎に洋子の電話番号を教えた。
b. 太郎が次郎に教えた (洋子の) 電話番号は、7桁である。(p. 426)

a の下線部は、[x が洋子の電話番号である]という命題関数を表す1階の変項名詞句である。そこを主要部として関係節化したbの下線部は、(11)[2階の変項名詞句として解釈可能な名詞句の条件[...]:Nを主要部とする修飾節を伴う名詞句 [...e_i...N]は、e_iが1階の変項名詞句が現れる位置であるならば、2階の変項名詞句として解釈可能である。]に従えば、2階の変項名詞句かAタイプ読み名詞句になるだろう。しかし、この文全体は措定文であり、下線部は「通常の個体指示的な機能をもつようにみえる。この現象がどのような説明を受けるのかは今後に残された問題である」(p. 427)と峯島は論文を終えている。

そもそも7桁という属性を帰され得るのは、電話番号であっても、命題関数・問いではないだろう。したがって、bの下線部は、命題関数を表す変項名詞句ではないはずだから、確かに問題である。N-意味理論では、変項名詞句などの名詞句の意味機能が、述語一項の関係から独立して名詞句が1つだけ担う性質であるかのように扱われている。しかし、実際にはそれは述語と相対的に、つまりどの述語のどの項であるかによって決まるため、bの「電話番号」のように「教えた」と「7桁である」という2つの述語と同時に関係を結ぶ場合に不都合が生じることがある。

次の例も同様である。

- (39) 捜査員が突き止めた犯人を刑事が拘束した。⁶

「犯人」は「突き止めた」の項としては、[x が犯人だ]という命題関数を表す変項名詞句のはずである。しかし、どんなに有能な刑事でも命題関数を拘束することはできないから、「捜査員が突き止めた犯人」は「拘束した」の項としては指示的名詞句のはずであり、「犯人」がどちらであっても問題が残る。以上の問題は、指示的名詞句と変項名詞句を全くの別物と考えるN-意味理論の根幹に関わる問題である。⁷

RFTでは、(38)bと(39)の下線部はそれぞれ次のようなRFに対応すると分析する。(発話で追加することが意図された情報を表す部分に下線を付す。)

⁶ この例文は筆者が西山佑司氏、西川賢哉氏、田中太一氏らと議論をする中でできたものである。

⁷ 「そもそも、文中のある名詞句について、それを指示的名詞句でもなく、変項名詞句でもない、中立的なものを仮定することなどは不可能であるばかりでなく、語用論的操作によって指示的名詞句を変項名詞句に置き換えることも、また、逆に、変項名詞句を指示的名詞句に置き換えることなど理論的に不可能なのである。」(西山2013: 165)

- (40) 「太郎が次郎に教えた洋子の電話番号」／@聞き手／存在論的範疇 番号⁸／ID_x (聞き手がその番号を知っていると想定するなら a)／内容特徴 太郎が次郎に x を教えた⁹；x が洋子につながる¹⁰；x が 7 桁である
- (41) 「犯人」／@聞き手／存在論的範疇 人／ID_x (聞き手が同定できていると想定するなら a)／内容特徴 捜査員が x を突き止めた¹¹；刑事が x を拘束した

RFT では命題関数を表す変項名詞句という概念を用いないため、特に問題は生じない。

3.3 新たなデータの検討：「あなたは勝ちのカードを知っている」の2つの解釈

以上、高階の変項名詞句について N-意味理論が説明を提供した部分は、RFT でも説明できることと、N-意味理論の分析に伴う問題は RFT の分析にはないことを示した。以下では、これまで検討されていないデータを対象にして、同様のことを続けていく。

潜伏疑問名詞句は、近年形式意味論で盛んに研究されていて、興味深いデータが数多く発掘されている (RFT の分析は山泉 2021 参照)。次は Roelofsen and Aloni (2008) からの一例である (筆者訳)。

あなたの前に 2 枚のトランプのカードが伏せて置かれているとしよう。1 枚はハートのエースで、もう 1 枚はスペードのエースだが、どちらがどちらなのかはわからない。あなたはどちらかを選ばなければならず、もし選んだのがハートのエースだったら 10 ユーロをもらえるが、スペードのエースだったら 10 ユーロを失う。では、次の文を検討しよう。

- (42) あなたは勝ちのカードを知っている。(原文：You know the winning card.)

この状況において、この文は真か偽か？ 一方では真だ。ハートのエースが勝ちのカードだと知っているのだから。他方では、この文は偽だ。あなたの知る限り、勝ちのカードは左にあるかもしれないけれども、ちょうど同じくらいの確率で右にあるかもしれない。直観的には、この状況において勝ちのカードが同定される方法は 2 つある。位置による同定 (右のカード、左のカード) と、スーツによる同定 (ハートのエース、スペードのエース) である。[(42)]が真と判断されるか偽と判断されるかは、これらの視座のうちどちらを採用するかによる。スーツによる同定が採用されたら、文は真と判断される。しかし、位置による同定が採用されたら、文は偽と判断される。(Roelofsen and Aloni 2008、筆者訳)

⁸ 番号は、四則演算の項にならない、一桁ずつ読まれるなどの点で数と違うため、数という範疇とは別と考える。

⁹ RFT の用語で言うと、太郎が次郎の心においてこの RF の ID を x から a にしたということ。

¹⁰ 「洋子の電話番号」における洋子と電話番号の関係を補った。

¹¹ RFT の用語で言うと、捜査員が捜査員達の心においてこの RF の ID を x から a にしたということ。

この2つの読みをN-意味理論とRFTの概念装置でどのように分析できるだろうか。英語のknow (about)の語法研究に立ち入らないために、日本語で考えることにする。また、話を単純にするために、次の読みも問題にしない。ハートのエースが勝ちのカードであることを知っている話し手が、聞き手がハートのエースを（それが勝ちのカードであることに関係なく）知っていることを、「勝ちのカード」でハートのエースに言及しつつ述べている。（さらに、これには+tokenの読みと-tokenの読み、つまりハートのエースというものを知っているという読みがある。）

N-意味理論では、位置による同定が採用されて偽となる読みでは、「勝ちのカード」は変項名詞句で、[xが勝ちのカードだ]という命題関数を表し、「知っている」がxを疑問詞化していると分析されると思われる（西山 2013、山泉 2021）。これは問題ない。

一方、スート(♥♠♦♣)による同定が採用されて真となる読みの場合、「勝ちのカード」は1階の変項名詞句とは言えないだろう。なぜなら、その命題関数のxには個体しか入ることができず、「ハートのエース」のような記述は入らないと想定されている考えられるからである。「勝ちのカード」は指示的名詞句とも考え難い。それらよりは有望そうなのは、「勝ちのカード」を2階の変項名詞句と考えて、[Xが勝ちのカードだ]を表し、それを[xがハートのエースだ]が埋めるという分析だろう。しかし、そもそも[xがハートのエースだ]という命題関数は「勝ちのカードだ」という述語の項になれるのだろうか、また、ある命題関数が勝利のカードであるという属性を持つというのは、存在論的範疇が合わないのではないか、という疑問が残る。¹²

RFTでは、この例は次のように分析できる。真となる読みも偽となる読みも、「勝ちのカード」は次のようなRFに対応する。

- (43) 「勝ちのカード」／ @聞き手／ID_x／存在論的範疇 モノ／内容特徴 xを選ぶ & xがハートのエースだ → 聞き手は10ユーロを得る、xを選ぶ & xがスペードのエースだ → 聞き手は10ユーロを失う

真となる読みは、1つ目の内容特徴が聞き手の心のRFに入っているということである。偽となる読みは、そのRFのIDが定項であるということであり、そうではないため偽となる。

4. ラティス構造による解釈の多様性の分析

2.3節で、AタイプとBタイプの解釈が可能な名詞句は第3の解釈も可能であり、変項名詞句の階層という概念では、それを含めた解釈の多様性が捉えられないことを論じた。この3種や変項を含まない解釈の名詞句が並列できることは、問題の名詞句の解釈を単純にAタイプ・

¹² なお、“the winning card”は、関係節の空所を含まず、それゆえに(11)「2階の変項名詞句として解釈可能な名詞句の条件」を満たしていないと考えるのは、N-意味理論によれば誤りである。「形容詞、形容動詞、動詞といった述語としての機能を果たす語が名詞を修飾しているケースは、(中略) [連体修飾節+名詞]のケースと実質的には同類と考えてよいであろう」(今井・西山 2012: 107)とされているからである。

B タイプ・1 階の変項名詞句と意味論的に分類し尽くすことはできない、ということを示唆する (例 (22))。では、多様な解釈をどのように捉えたらよいのか。以下では、試論として、次の文の多様な解釈をラティス構造 (Partee et al. 1990: Ch. 11 参照) にまとめる。

(44) 太郎は、今の実験で一番重要なことを知っている。(峯島 2013a: 411 を改変)¹³

4.1 基本レベルの解釈

この文の多様な解釈には、抽象的なものから具体的なものまで、様々な粒度がある。まず、峯島 (2013a) や今井・西山 (2012) で論じられた粒度の解釈を基本レベル¹⁴の解釈として挙げていく。今の実験で一番重要なことは実験室の温度であるとしよう。ただし、それが摂氏何度が決まっているのか、決まっていないのかは場合によって異なる。

(44)には、A タイプ読みと B タイプ読み (2.2) 以外に、第3の読みがあることを2.3で論じた。峯島が次のように説明するものである：「知っている」の意味的な項を「一こと」という形の名詞句が表す命題ないし事実 (fact) とみなして、例えば、「太郎は今度の実験で一番重要なこと、つまり、部屋の温度が26度であることを知っている」と解釈する」(p.428)。2.3では話をあれ以上複雑にしないためにあえて触れなかったが、この解釈は、実は2通りに分かれる。次のように想像すると違いがわかりやすい。1つの解釈では、太郎が実験チームのメンバーである場合で、太郎は実験における温度の重要性を知っている (基本レベルの解釈1とする)。もう1つの解釈では、太郎は実験とは関係ないが、温度計を持って実験室で遊んでいる幼児の場合で、太郎は温度の重要性を知らない (基本レベルの解釈4とする)。以上、計4つの解釈を下にまとめておく。

解釈1. 第3の読み1《太郎は今の実験で一番重要なことを知っている。つまり、部屋の温度が26度であることが実験で一番重要だと知っている》

解釈2. A タイプ読み《太郎は、今の実験で一番重要なこと、つまり、実験室の温度が何度であるのかを知っている》

解釈3. B タイプ読み《太郎は、何が今の実験で一番重要なことであるのかを知っている》

解釈4. 第3の読み2《太郎は今の実験で一番重要なこと、つまり、部屋の温度が26度であることを知っている》(それが今の実験で一番重要だと知っているかどうかについては、後述するようにこのレベルでは中立的。)

なお、26度がRF全体に対応せず、特質の値にしか対応しないため、《26度そのものを知っている》という解釈はないが、定項の部分がRF全体に対応する場合も検討しておこう。

¹³ 各解釈の位置付け (@) を揃えるため、「今度」を「今」に変更した。

¹⁴ 階層のカテゴリー化の基本レベル効果が見られるということは含意しない。

(45) 太郎は花子が好きな牛井屋を知っている。

その牛井屋が松屋だとして。変項が埋まる関係は次のように表せる。

(46) x が花子が好きな牛井屋だ

↑ @太郎 …解釈 1

松屋 @太郎 …解釈 2

解釈 1 は、x に松屋が入るということを太郎が知っているというものである。そのことをこの図では「↑」で表し、太郎の心にそれが入っていることを「@太郎」で表している。解釈 2 は太郎が単に松屋を知っているというものである。そのことを上の図では松屋の後の「@太郎」が表している。(45)は、変項の値自体が変項を含まないため、その分解釈の幅が(44)より狭い。

4.2 下位レベルの解釈

基本レベルの解釈は、さらに細分化できる。今の実験で一番重要なことが実験室の温度の場合に(44)が実際に使用されたら、以下のような詳細まで理解されないとコミュニケーションが成功したと言えないことが多い。温度が自由変項になっている解釈 2 では、温度が重要とされる理由が一番重要な従属変数だからという場合や一番重要な独立変数だからという場合などがある。話し手は、どの意味で重要なのかまで聞き手が理解することを期待することが多いだろう。温度が定項の場合、温度が統制要因（意図した因果関係を見るために統制しなければならない要因）であるということが意図されていることがあろう。その場合さらにどう統制するか（一定かランダムか、西山 2007: 14）も話し手の伝えたいことに入るかもしれないし、一定なら何度にするか、ランダムならどの範囲でランダムにするかまで入ることもあるかもしれない。以下では、このような下位レベルの違いは問題としないが、このレベルの違いも上のレベルの違いと同様、全て概念構造でコード化されるものであり、不変性の主張（the Tenet of Constancy, Jackendoff 1992:5）に従って、RFT のような概念構造の理論は区別できる必要がある。

4.3 基本レベルの解釈を分解する

基本レベルの解釈よりも抽象的な解釈がある。基本レベルの解釈を(45)の分析に使ったフォーマットに従って分解し、適宜変項に置換することでそれを捉えることができる。

まず、解釈 3（B タイプ読み）は次のように表せる。

(47) X が今の実験で一番重要だ

↑ @太郎

実験室[温度 : x 度]

既に述べたように、「↑」は自由変項の値を充足するという関係を表す。この場合は、Xに〈実験室の温度がx度だ〉が入るということであり、「@太郎」は、そのことが太郎の知識としてあるということを表す。この読みにおいては、太郎は実際に実験室が何度かを知っているかも知らなくてもよい。どちらかなのかによって読みの細分化が起こり得る。知っている場合には、実験室[温度：x度]の横にも「@太郎」が一応付くことになる。

解釈2 (Aタイプ読み) は次のように表せる。

(48) Xが今の実験で一番重要だ

↑

実験室[温度：x度] @太郎

「@太郎」は、変項xを定める知識を太郎が持っているということ、つまり、太郎が実験室の温度が何度かを知っているということを表す。この読みにおいては、太郎は部屋の温度が何度であるかが実験に重要だということを知っているかも知らなくてもよい。これがどちらなのかによって読みの細分化が起こり得る。知っている場合は、「↑」の横に「@太郎」が一応付く。

解釈4 は次のように表せる。

(49) Xが今の実験で一番重要だ

↑

実験室[温度：a度] @太郎

「@太郎」は、実験室の温度が現にa度であることを知っているということである。x度ではなくa度となっている点がAタイプ読みとは異なる。この読みにおいては、太郎は部屋の温度が今の温度であることが実験に重要だということを知っているかも知らなくてもよい。これがどちらなのかによって読みの細分化が起こり得る。知っている場合は、「↑」の横に「@太郎」が一応が付く。

解釈1 は次のように表せる。

(50) Xが今の実験で一番重要だ

↑@太郎

実験室[温度：a度]

「@太郎」は、実験室の温度がa度であることが今の実験で一番重要だということを知っているということである。この読みにおいては、部屋が現にa度である必要はなく、a度であっても太郎はそのことを知らなくてもよい。これによって読みの細分化が起こり得る。知っている場合には、実験室[温度：a度]の横にも「@太郎」が一応付くことになる。

これまで4度出てきた「一応」とはどういうことかを説明する。何度も述べているように、解釈1から4において「@太郎」が付いていなかった方にも「@太郎」を付けることで表せる解釈も可能である。そうすると、解釈2と3、そして解釈1と4に「@太郎」を付けたものが表記上同じになってしまう。しかし、その場合でも、2つの解釈を同一とはみなせない。つまり、「知っている」は基本的にどちらか一方の「@太郎」を表すのであって、もう一方はたとえ太郎が知っているとしても、それは聞き手が補ったコンテクスト的想定であって、話し手が利用したコードにおいて言語的に意味されているわけではない。以下の理由からそう考えられる。

たとえば、実験で一番重要なのは実験室の温度が26度であることで、実験室の温度が26度ではない状況を考えて。「@太郎」が「実験室[温度:26度]」の横にだけ付いている場合、(44) (太郎は、今の実験で一番重要なことを知っている。)は偽と判断される。一方、「@太郎」が「↑」の横にだけ付いている場合は、(44)は真と判断される。「@太郎」が両方に付いている場合、興味深いことに、真とも偽とも解釈できる(同時に真でもあり偽でもあるという解釈はできないだろう)。このことから、「知っている」がどちらの意味なのかによって曖昧だということが示唆される。ただし、発話を真と解釈しないと関連性が達成できる見込みが薄くなるためか、真と解釈する方にバイアスが強くかかる。(44)を真と解釈した場合の「知る」は「↑」の横に「@太郎」があることを意味し、偽と解釈した場合の「知る」は実験室[温度:a度]の方に「@太郎」があることを意味するということである。

(44) 太郎は、実験を計画した張本人だから、今の実験で一番重要なことを知っているよ。実験室の温度が26度であることが一番重要だって知らないはずがない。

「どちらも」を付けても、「@太郎」が両方に付いていることを意味することはできない。

(51) ??実験の計画者で今温度計を持って実験室にいる太郎は、今の実験で一番重要なことをどちらも知っている。(田中太一、p.c.)

曖昧な表現はそれが潜在させている複数の意味を同時に実現させることが通常の発話ではできないからである(例 ??両方のくも(蜘蛛・雲)を写真に撮った)。また、実験の計画者の太郎が自宅にいて実験室の温度を知らず、部外者の次郎が温度計を持って実験室にいる場合、「@太郎」は「↑」の横だけにあり、「@次郎」は「実験室[温度:26度]」の横だけにあることになる。このことを次のように表現することは難しい。

(52) 太郎は今の実験で一番重要なことを知っている。次郎もそうだ。

このことは、「↑」の横の「@～」で表される「知っている」と「実験室[温度:26度]」の横の「@～」で表される「知っている」が、日本語では区別されていることを示す(もつとも、次節

で論じるように、この区別は等閑視されることもある)。

以上をまとめると、「知る」には曖昧性があるということになる。「太郎が…知っている」が意味するのはどちらか一方に「@太郎」があるということに相当する。もう一方にも「@太郎」があるかどうかは、「知る」がコード化することではなく、それを太郎が知っているかどうかを聞き手が知っているかどうかによる。この場合は、コード化されたこともそうでないこともどちらも「知っている」で表せるために紛らわしいのだが、明示的に伝達されていない想定が呼び出されてコミュニケーションに利用されることは常に起こっていることであり、コード化されていない方の「@太郎」が付いているのはその特殊ケースにすぎない（これを表記する場合には、コード化された情報と区別するために、「(@太郎)」とでもすべきだろう)。

4.4 上位レベルの解釈

基本レベルの解釈4つを統一したフォーマットで表示できた。これを抽象化することによって、上位レベルの解釈が得られる。そのような抽象的な読みを実際にすることがあるのかと思う読者がいるかもしれない。しかし、2.3で第3の読みの説明を始めて読んだ際に、解釈1や解釈4のように詳細に理解したのではなく、しかも、どちらの解釈のことだろうかと疑問に思わなかったとすれば、次のように表示できる抽象的な理解をしたのではないだろうか。

(53) Xが今の実験で一番重要だ

↑◆

実験室[温度 : a 度] ◇

もちろん、実験者達の間でのコミュニケーションであれば、このような抽象的な理解では、コミュニケーションは成功しないだろう。下位レベルの解釈の分化を考慮に入れると、基本レベルの解釈でさえ不十分であろう。しかし、言語学の議論における例文の説明としては、この程度の理解で期待した関連性が達成され、充分と判断されることがあり得るということである。

2.3において読者が「知っている」の意味的な項を「一こと」という形の名詞句が表す命題ないし事実 (fact) とみなして、例えば、「太郎は今度の実験で一番重要なこと、つまり、部屋の温度が26度であることを知っている」と解釈することも可能であろう(峯島 2013a: 428) という引用を読んだ文脈においては、温度が自由変項ではない解釈があるということが議論の焦点であった。それ以外の、「@太郎」がどちらにあるかは、(言語の意味ではなく)世界の状況としてはどちらか(あるいは両方)である。¹⁵「知っている」を含む文を用いたコミュニケーションにおいて、「知っている」がどちらをコード化しているのかは解消されるべき曖昧性であったとしても、等閑視されることはあり得ると考える。この上位レベルの読みはそのような場合であり、「@太郎」が◆か◇のどちらかにあるかは決定していない。残りの一方にも「@太郎」

¹⁵ 同様に、「実験室[温度 : □度]」や「実験室[温度 : x 度]」の横に「@太郎」が付いている解釈の場合、世界の状況としては、太郎の心において温度は定項である。

あるとしても前節で論じた意味において“一応”あるに過ぎず、「知る」が直接コード化するものではない。

基本レベルの解釈2つから次のスキーマが抽出できる。Aタイプ読みとBタイプ読みの共通性は(54)のように捉えられる。

(54) (解釈2と3から) Xが今の実験で一番重要だ

↑ ◆

実験室[温度 : x 度] ◇

(55) (解釈1と3から) Xが今の実験で一番重要だ

↑ @太郎

実験室[温度 : □度]

(56) (解釈2と4から) Xが今の実験で一番重要だ

↑

実験室[温度 : □度] @太郎

4.5 最上位レベルの解

上位レベルの解釈の差を捨象すると次のようになる。

(57) Xが今の実験で一番重要だ

↑ ◆

実験室[温度 : □度] ◇

ここまでは、今の実験で一番重要なことは実験室の温度だというコンテキストがあった。これも捨象すると下のようになる。(44)の言語的意味の表示ということになる。

(58) Xが今の実験で一番重要だ

↑

□₁ (内容 ID …□₂…) □₁か□₂の少なくとも一方が定項@太郎

「重要だ」はコトを項にとるので、内容 ID の RF が X に埋まる。その内容は□₂の部分に変項を含み得る。太郎の心においては、□₁か□₂の少なくとも一方が定項である。□₁が定項の場合は、何が今の実験で一番重要かが定まっている。□₂が定項の場合は、重要である事柄に含まれる値が定まっている。もう片方の□が太郎の心において定項か自由変項かは決定されていないし、□₁・□₂@聞き手や□₁・□₂@話し手が定項か自由変項かも決定されていない。

4.6 まとめ

(44)の様々な抽象度の様々な読みは、下図に示すラティス構造にまとめられる。

言語的意味 最上位レベル 上位レベル 基本レベル

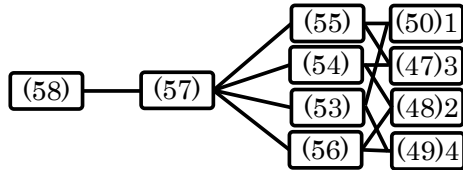


図 (44)の解釈のラティス (下位レベルは省略)

このようにまとめることができるのは、命題関数を表す変項名詞句と対象を指示しようとする指示的名詞句という N-意味理論の区別を廃し、名詞句は全て RF (かその一部) に対応すると RFT が考えるからである。

N-意味理論では、これらの読みが少なくとも基本レベルにおいては意味機能の点で区別されるため、文法レベルで違いがあるということになる。しかし、@太郎が「↑」の横に付くか「実験室[温度: □度]」の横に付くかの違い以外は、文法的に区別されていると考える根拠は見当たらない(2.3)。他の違いは、どの分け方を意味論レベルの区別とし、他は語用論レベルの区別としても恣意的になることは避けられないため、言語がコード化しているわけではなく、言語から独立の概念構造においてだけされる区別であると考えべきである。

参考文献

Culicover, Peter W., and Jackendoff, Ray. (2005) *Simpler syntax*. Kindle edition. Oxford: Oxford University Press.

Ginzburg, Jonathan, and Ivan Sag. (2001) *Interrogative investigations*. Stanford, CA: CSLI.

Jackendoff, Ray. (1992) *Languages of the mind*. Cambridge, Mass.: MIT Press.

Partee, Barbara H., ter Meulen, Alice, and Wall, Robert E. (1990) *Mathematical methods in linguistics*. Dordrecht: Kluwer Academic Publishers.

今井邦彦・西山佑司 (2012) 『ことばの意味とはなんだろう』 東京: 岩波書店.

クーン, トーマス (中山茂訳) (1970/1971) 『科学革命の構造』 東京: みすず書房.

ジャッケンドフ, レイ (郡司隆男訳) (2002/2006) 『言語の基盤』 東京: 岩波書店.

ジャッケンドフ, レイ (大堀壽夫他訳) (2012/2019) 『思考と意味の取扱いガイド』 東京: 岩波書店.

スコット=フィリップス, トム (畔上耕介他訳) (2015/2021) 『なぜヒトだけが言葉をはせるのか』 東京: 東京大学出版会.

ドネラン, キース (荒磯敏文訳) (1966/2013) 「指示と確定記述」 松阪陽一編訳『言語哲学重要論

文集』 pp. 91-129. 東京：春秋社.

西山佑司 (2003) 『日本語名詞句の意味論と語用論』 東京：ひつじ書房.

西山佑司(編著)(2013) 『名詞句の世界』 東京：ひつじ書房.

峯島宏次 (2013a) 「変項名詞句の階層」 西山編著.(2013) pp. 407-430.

峯島宏次 (2013b) 「自由拡充をどのように制約するか」 西山編著.(2013) pp. 513-557.

山泉実 (2020a) 「指示参照ファイル理論序説」 『日本語・日本文化研究』 30: 1-28. 大阪大学言語文化研究科日本語・日本文化専攻.

山泉実 (2020b) 「認知的視座からの意味論と形而上学」 『日本語・日本文化研究』 30: 29-52. 大阪大学言語文化研究科日本語・日本文化専攻.

山泉実 (2021) 「潜伏疑問名詞句再考」 『言語文化研究』 47: 101-121. 大阪大学大学院言語文化研究科.

山泉実 (投稿中 a) 「潜伏命題名詞句再考」

山泉実 (投稿中 b) 「視座を俯瞰した認知メタ形而上学の試み」

Rethinking the Hierarchy of Variable Noun Phrases in N-Semantics: From the Viewpoint of Reference File Theory

Minoru Yamaizumi

yamaizumi.minoru@gmail.com

Keywords: Variable noun phrases, N-semantics, Reference File Theory, concealed questions

Abstract

This paper revisits the hierarchy of “variable noun phrases” in N-semantics from the viewpoint of Reference File Theory (RFT). After introducing the hierarchy, I claim that the N-semantic analysis based on the notion of a variable noun phrase fails to capture a significant generalization because it cannot account for cases where the value of the higher-level variable does not contain a variable. I go on to show that RFT can not only account for what N-semantics has revealed about the hierarchy but also accommodate some new data that are not covered by the N-semantic analysis. I conclude by presenting, as an alternative to the hierarchy, a lattice of interpretations at various levels of specificity based on an RFT analysis.

(やまいずみ・みのる 大阪大学)